

■学校経営のポイント

関わることの大切さ

喜名 朝博

都内の義務教育学校を訪問した。学校の特色として1年生から9年生での「縦割り班活動」があり、日々の清掃活動も縦割り班で行っている。異学年交流の教育的効果については知られているところだが、今年度の全国学力・学習状況調査の質問紙の結果に数字として表れているという。

関わることは認め合うこと

「自分には、よいところがあると思う」「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」という事柄に対し、「当てはまる」と回答した割合は、6年生も9年生も全国平均より10～20ポイント高い結果だった。異年齢の仲間と関わり合う場があること、より多くの教師と関わることで、精神的な安定が図られているのではないだろうか。

関わることで育つ

訪問した日は、4年生と7年生がグループになって学校周辺の安全マップ作りのために校外に出ているところだった。帰校してくる子どもたちの様子を見ると、4年生からは充実した学習ができた自信の顔が、7年生からは無事帰校できた安堵の顔がうかがえた。7年生の責任感は、同学年の関わりだけでは生まれまいであろう。さらに、自分を写す鑑としての対象があるから自己肯定感が高まるのだ。子どもたちが成長していく瞬間を見ることができた。

関わることは欲求である

マズローの欲求5段階説における社会的欲求や承認欲求は、他者と関わることで満たされていくものであり、関わること自体に大きな意味がある。

令和5年に実施された文科省の「義務教育に関する意識に係る調査」では、学年を問わず、「1人で勉強したい」という子どもたちよりも「友達と一緒に勉強したい」と考える子どもたちの方が多く、全体の6割

以上となっている。まさに、子どもたちは「関わる」ことを欲しているのだ。

グループワークで関わりを

1時間の授業の中にグループワークを取り入れよう。クラス全体では発言できなくても、グループの中なら安心して発言できる子どもたちがいる。クラスで共有する際に「どんな話し合いになったの」と問えば、事実を伝えるだけなのでハードルは高くない。クラスの中で発言できたという小さな達成感も自己肯定感を高める。

グループワークでの関わりを通して、子どもたちは、社会性や協調性、それを支えるコミュニケーション能力を養っていく。主張するだけでなく、自分の気持ちに折り合いをつけるという大事なスキルも獲得していく。それは、相手への思いやりとして昇華していく。相互に思いやれば、その場の空気は温かくなっていく。「なんかこのクラスいいな」と漠然と思うときがあるが、それは、この温かい空気に包まれているからではないだろうか。

関わることは自分を知ること

様々な人と関わる中で、自分の考えや価値観が揺さぶられ、それらを客観的に見直すことになる。その自己理解こそ、成長のバネとなるのだ。また、関わっている他者からの意見や評価を受けることで、自分では気付かない自分に気付かされる。ジョハリの窓の「盲点の窓」(自分は知らないが、他者は知っている自分)は、他者と関わることによって解放されていく。さらに、自分も他者も知らない自分、「未知の窓」は、多様な経験によって見出されていくが、そこにも、他者の後押しや関わりが欠かせない。子どもたちが学びを通しての関わる場面をもっと作っていこう。

(きな・ともひろ＝国士舘大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●子どもも大人も安心していられる「子どもが主語」の学校のつくりかた。《大好評につき増刷！》

「子どもが主語」の学校へようこそ！

森万喜子【著】 四六判／定価 2,420 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp> をご利用ください。

